

## “コウバ”としてのノコギリヤネ

(断章“ノコギリヤネのある風景”その6)



▲「尾張太古之図」

真清田神社の杜に棲む霊鳥、マスミダカラスは、一宮を大きな“からっぽ”とたとえ、その始まりを“虚構”と言い放った。

一枚の古図が思い浮かぶ。豊田市の猿投神社の宝蔵から発見された「尾張太古之図」である。実物は知らないが、それをもとに作成されたという図は、文献、Web上に散見される。上図もその一つである。原図は養老元年（717年）の作と伝わるが、実際は後世の作らしい。昔、尾張・美濃の一帯は入海であり、そこに大小多くの島々があったことを伝えている。科学的な研究によれば、古代の推定海岸線に通じるものがあるという。まさに、“虚構の想像力”である。真ん中の大きな島には「中島郡一ノ宮」の文字が見える。

太古の昔、尾張は海であり、その真ん中に浮かぶ島に一宮があったという。明治時代に生まれたノコギリヤネと太古の尾張の風景に何か関係があるというのか。ノコギリヤネが簇生し、いまでも数多く残っているその尾張の大地の形成、営みを探ることから、ノコギリヤネの未来物語が見えてくるのではないかと思うのだが。

ノコギリヤネ（神奈川県藤沢市在住／一宮市今伊勢町出身／のこぎり二に出没）

## 1. 2,000 棟のノコギリヤネ

ノコギリヤネは、10 年前の調査（尾張のこぎり調査団、2010.12.31）で 2,252 棟が確認されている。大変な労力を費やした作業であったと思われる。市域のほぼ南半分は未調査である。しかし、現在、数だけなら、衛星画像から比較的容易に概数を把握することができる。どうやら、2,000 棟程のノコギリヤネが残存しているようである。使われ方は分からない。また、推測でしかないが、10 年前には、3,000～3,500 棟ほど残っていたかもしれない。（巻末参照）

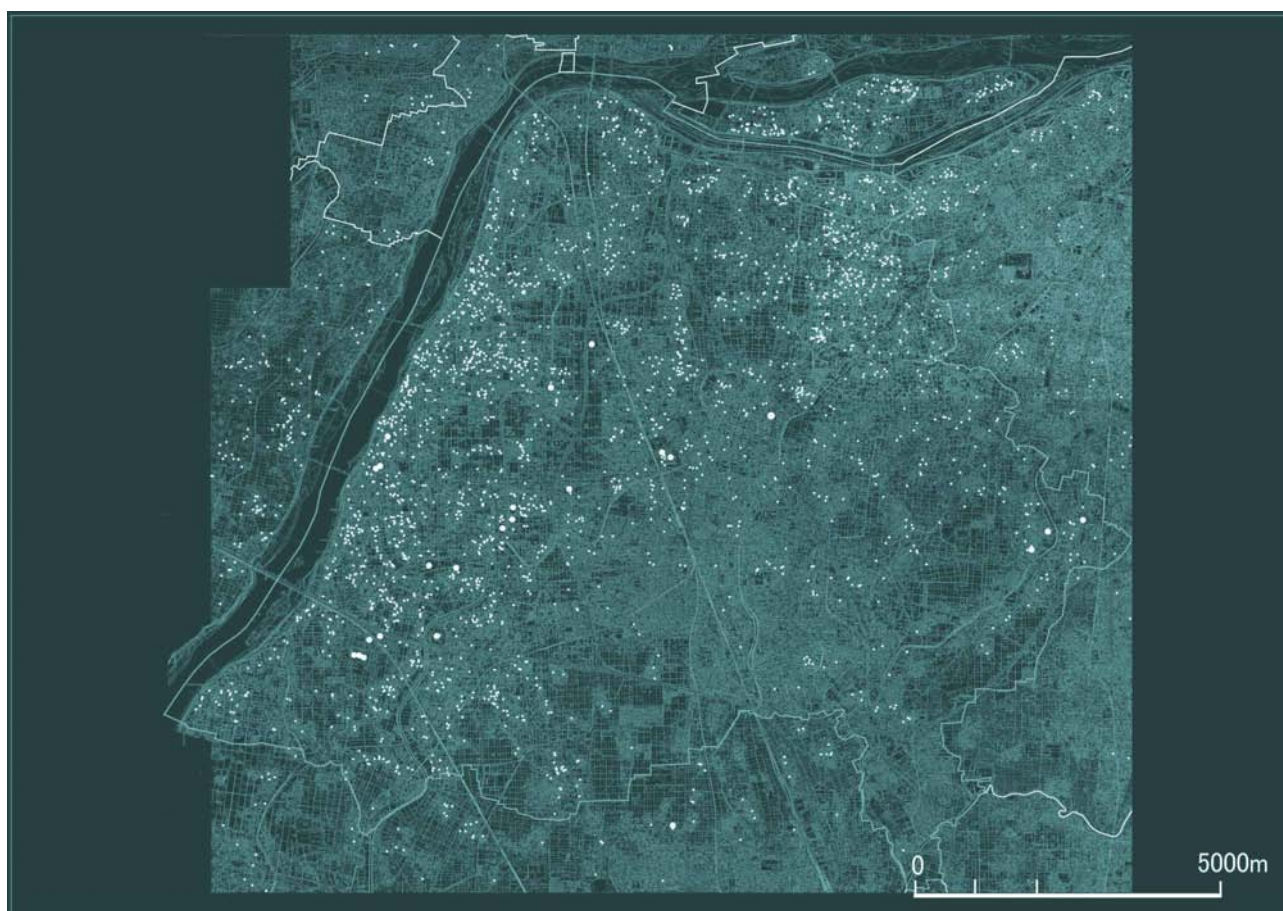
その数にどんな意味がある？ オマエが執心するノコギリヤネは、その多くがもう役に立たないお荷物になっているんじゃないのか。使われないまま。

突然、あの声が聞こえてきた。マスミダカラスか？

始まりは、ノスタルジーだった。それが、「のこぎり二」と出会い、「期待」に変わり、そこに集う人たちを知り、ノコギリヤネの未来の「可能性」を実感した。それは、ずっと、このふるさとに期待していたものかもしれない。いや、そんな「ひと」を待っていたのかもしれない。そのノコギリヤネが、いまま 2,000 棟も残っているなんて。・・・そう、星の数ほど。

マスミダカラス、オマエに頼みがある。この尾張の大地の始まりを見せてくれないか。

「オワリの始まりか」マスミダカラスは、つぶやくと、まっすぐ上空に向かって、急上昇し始めたようだ。マスミダカラスの眼を借りた映像がそれに従った。



▲ ノコギリヤネ分布図



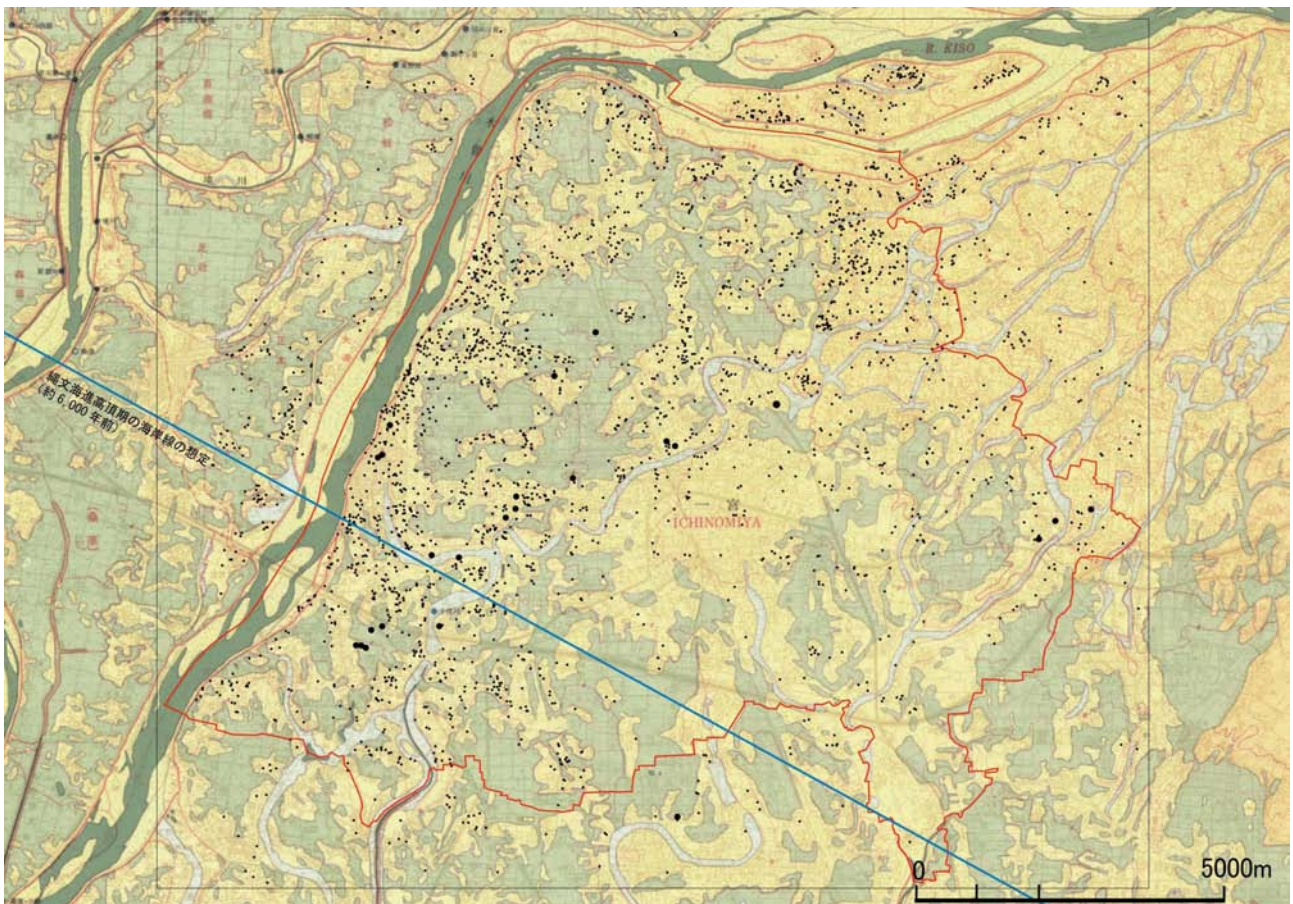
## 2. ノコギリヤネの生まれた大地

眼下には海が広がっている。マスミダカラスは、右手前方、海に突き出た岬が現在の熱田あたり、左手の山は多度山だと言う。正面に金華山、その背後に両白山地が連なる。これが、氷河期後、温暖化の進んだ尾張の“縄文海進”の風景なのか。およそ 6,000 年前、濃尾平野はほぼ半分が海である。北東方向から木曽川の水が流れ込み、海水と入り混じり始原の大地を形成する。

木曽川の流路は木曽八流とも言われるように、現在と異なり、犬山あたりから、網の目状にいくつもの河川に分かれて一宮の方角に流れ込む。河口部に扇状地を形成する。分派した河川は蛇行し、時間とともに流路を変える。運ばれた土砂が自然堤防となり、嵩上げされた土地を各所に造る。そして、潮の満ち引きとともに、無数の大小の島々が出現する。真ん中の大きな土地が中之島、一宮あたりということか。やがて、海が後退し、現在の海岸線に近づいていく。眼下のパノラマは、早送りのコマのごとく姿を変貌させていった。

ひとしきり、壮大なオワリジオラマのパノラマ動画が映し出された後、おもむろにマスミダカラスの声が聞こえてきた。

このオワリの大地（濃尾平野）は、扇状地、自然堤防、後背湿地、デルタといった基本的な地形が揃った見事な平野だ。オワリはまさに木曽川の賜物だよ。オワリの人間たちは、ここに生活の舞台を築いてきた訳だ。織物業の勃興もその一つだ。近代に入り、農村は、“工村”と見紛うほどになる。まさに、ノコギリヤネが創り出した風景だな。



▲ ノコギリヤネの立つオワリの大地



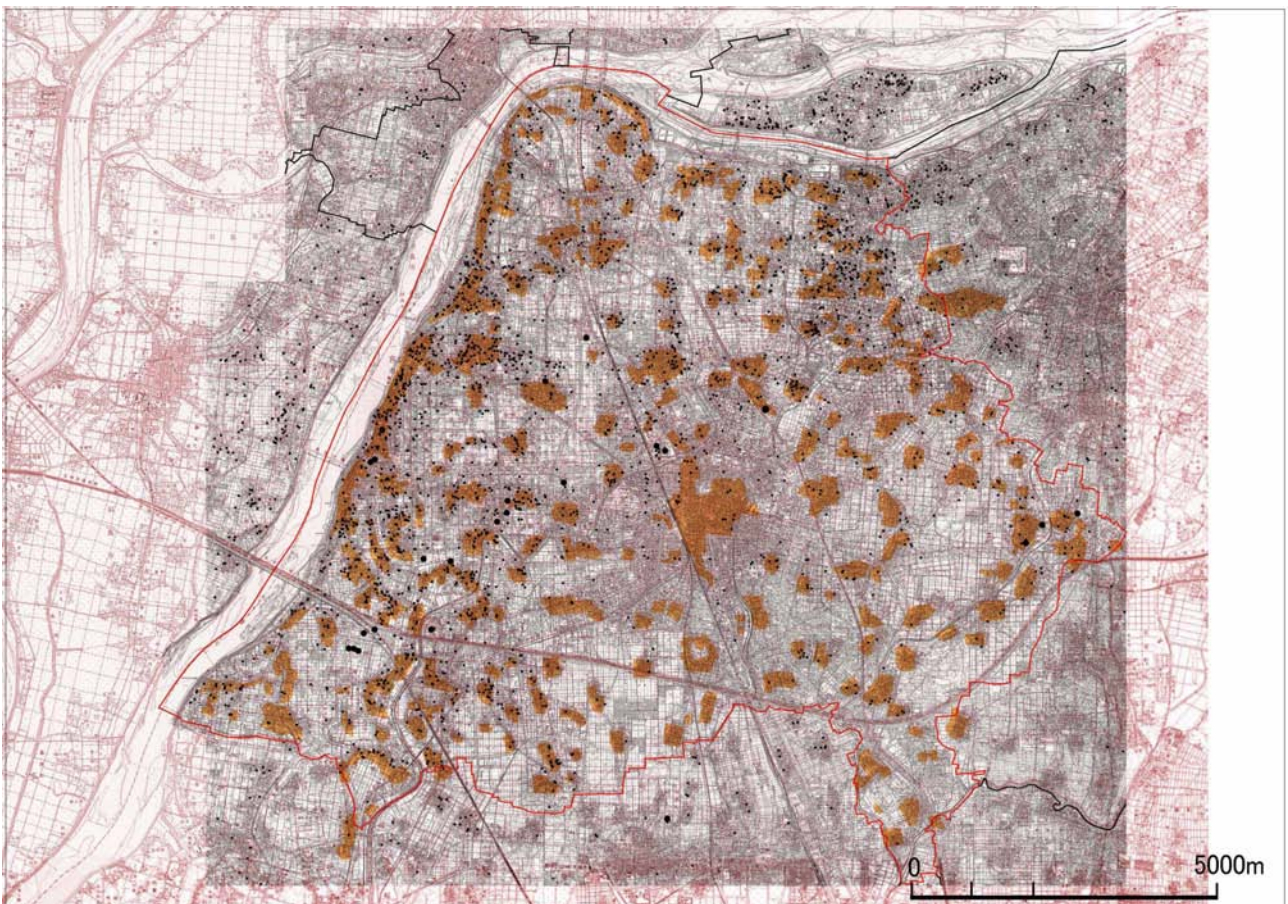
### 3. 生活の営みを反映するノコギリヤネ

眼下に広がるオワリの大地には集落が生まれ、農地が開かれていった。多くの時間が流れ、やがて鉄道が引かれ、駅が作られ、その周辺に街が形成されていく。時代は明治になっていた。ノコギリヤネの時代の始まりである。起に尾張地方第1号のノコギリヤネが誕生したのが、およそ100年前。そして、高度成長期のほぼ50年前に最盛期を迎えた。それは、村、まちの拡大、発展と連動していた。

栄枯盛衰。その後、多くのノコギリヤネが消えていった。比較的大きなものは、ショッピングセンターやスーパーに姿を変えた。住宅地に切り刻まれたものもある。もちろん、ずっと織物業を続けるものもある。ノコギリヤネは、まさに人々の生活の営みが反映する場であった。

100年前、50年前、現在か。始原、増大、そして消滅するノコギリヤネの大きな変化の局面だ。オマエが作ったその重ね図は、まさに断層図だ。微妙にズレ、ぴったりと重ならない。大地変動で地層がズレるのと同じさ。木曽川が作った自然堤防上に人が居つき、村からまちへ、そして都市へと成長してきた。でも、そこには生活のズレが生じる。ノコギリヤネは、その狭間で、この地域独自の風景を見せてきたのかもしれない。そうだとすれば、これからの消滅という局面で、ノコギリヤネはどういう風景を見せてくれるのかな。楽しみだな。

マスミダカラス。オマエの眼には、ノコギリヤネの未来がどう見えている？



▲ ノコギリヤネ 100 年マップ（燈色は 1920 年、紫色は 1970 年、グレーは現在の市街地図）

#### 4. 工場（コウバ）が開いて、公場（コウバ）に変わる

いや、それは、オレにもわからない。代わりに、こんなものを見せてやろう。オマエが「星の数ほど」と例えたノコギリヤネ大星群だ。

おおっ、プラネタリウム、いや、“マスカラ・スコープ”か。ノコギリヤネが天に向かって星と交信しているのか。工場の役目を終え、閉じていたノコギリヤネが、再び開いて人を招き入れ、使い方を変えて、天に輝く星になる。工場（コウバ）が“公場（コウバ）”になるという物語か。

一説には、工場の「工」には、二本の横棒を「天」と「地」で表し、縦棒がそれを結びつける「人」の営みを表すという由来があるという。そして、「公」の語源は、「私(ム)を開く(ハ)」だ。オマエたちの「公」は、オオヤケであり、「私」を排除している。“みんな”というならば、英語のパブリックのように「私」を包み込んだ本来の「公」が大切ではないのか。

空に向かって伸びるノコギリヤネは、もともと、大地と天をつなぐ人の営みの象徴かもしれない。そして、自らが開いて「公」になる。まさに「私」であるノコギリヤネだから、それが可能かもしれない。工場だって例外じゃない。そして、一宮市などという境界も関係ない。木曽川を挟んだ川島、笠松、羽島……。オワリは木曽川の地下水脈だけでなく、天空を通して繋がってきそうだ。公場か、・・・交場、考場、幸場。いろいろなコウバがあるじゃないか。



▲ マスカラ・スコープに映し出されたノコギリヤネ星群

## ○エピローグ

最後は、いささか言葉遊びになってしまったかもしれない。しかし、言葉があるから、物語が始まる。虚構が生まれる。

グーグルマップでノコギリヤネらしき構築物に見当をつけ、立ち姿を確認し、図面に落としていく。およそ2,000棟。概数は把握できたと思う。様々なノコギリヤネとの出会いは、楽しい時間であった。大きく開けた田んぼを前に、まさに天空に翔び立とうとするかのようなノコギリヤネの勇姿は、中島みゆきの「地上の星」の一節にある「草原のペガサス」を彷彿させた。

義弟が営むメンタルクリニックの待合室の壁に、第二次世界大戦でシベリア抑留経験のある画家、香月泰男のリトグラフ『青の太陽』が架かっている。この絵は、蟻になって穴の底から青空だけを見ていたい思いから描かれたという。深い穴から見ると、真昼の青空にも星が見えるという。クリニックに通う人の中には、この絵に惹かれる人が少なからずいる。いくばかりか傷ついた心は、暗い穴倉から見える青空と星の輝きに癒しを見出すのかもしれない。

いささか突飛だが、冒頭で掲げた「尾張太古之図」が重なって見えてくる。暗い穴倉は尾張の海、青い空は海の真ん中に浮かぶ中之島。その中之島に残るノコギリヤネと青空の星たち。そして、ノコギリヤネの連子窓を通して見えてくる天空に映し出された星群。“虚構の想像力”である。ノコギリヤネの創造空間は、“癒し”にも通じているのかもしれない。

オワリの天空に大きく輝く「のこぎり二」(+ゆたカフェ)。木曽川尾濃大橋のたもとでは、「スパーズ」が鮮やかに光を放つ。真昼の青空に光り輝き、連座する星の誕生が楽しみである。

2020.12.09



▲ 「青の太陽」(リトグラフ 1991/油絵 1969、香月泰男)



# ●ノコギリヤネ分布図

- ・衛星画像等から判断して、一宮市内に2,059棟を確認。(データは2020年11月末)
- ・ここでノコギリヤネは、のこぎり屋根形状建築物で、現況用途、利用状況には関わらず全てを含む。
- ・参考値は、10年前の尾張のこぎり調査団による調査結果(2010.12.31)。調査方法は異なる。

## 連区別ノコギリヤネ棟数

(( )は2010年の参考値)

(一宮市外は地図上に限定)

①旧市域	: 105
②今伊勢	: 90 (225)
③開明	: 62
④起	: 349 (469)
⑤奥町	: 181 (340)
⑥木曽川	: 243 (459)
⑦北方	: 87 (128)
⑧葉栗	: 135 (223)
⑨浅井	: 221 (320)
⑩西成	: 126
⑪千秋	: 56
⑫丹陽	: 26
⑬大和	: 41
⑭萩原	: 161
⑮朝日	: 176
	2,059 (2,164)

⑯羽島市

: 134

⑰笠松町

: 24

⑱岐阜市

: 16

⑲各務原市

: 148

⑳江南市

: 140

㉑岩倉市

: 5

㉒稲沢市

: 69

(実際と異なる連区等境界あり)

